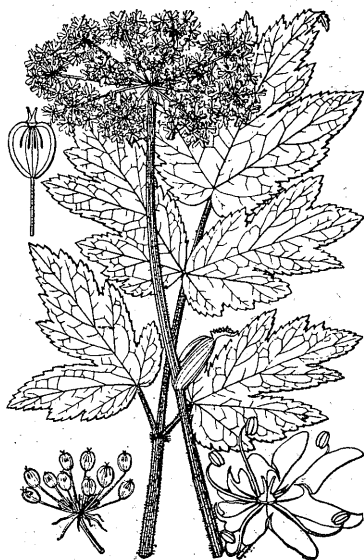
巻第七ニモ之ニヨク似タノガアルソレハ木ニ寄スト題シテ榛原、眞木柱、桃樹、桑、若楓ト伍シ次ニ花ニ寄スト題シテ山治左、垣津幡、韓藍、芽子ナドノ歌ガ列ネテアル此點カラ見ルトはんのきラシクモアレド手折ルナドノ語モアレバヤハリはぎト見ルベキデアル元來榛ノ字ハ潘岳ガ詩ニ荆棘榛ヲ成スナドアルヨリ針ト訓マセタマデヾ決シテはんのきニ當ル字デハナイ兎角古書ヲ解クニハ字ニ依ラズ事實ニ據ルノガ肝要デアル　（未完）

○新ニ食用植物ニ入リタルはなうど

愛媛縣立西條中學校　小田常太郎

牧野先生ハ吾人ノ常ニ敬慕シテ措カザル所デアル吾人ハ常ニ先生ノ指導ヲ仰ギツツアルモノデアルガ此度先生ノ慫慂ニ從ヒはなうどノ記ヲ草シ以テ聊カ御厚恩ノ萬分ノ一ニ報イントスルノデアル

はなうど（縮圖）（牧野富太郎氏ニ據ル）

はなうどハ繖形科ニ屬スル大形ノ多年生草本デアッテ學名ヲ Heracleum lanatum Michx. ト稱シ別ニ H. barbatum Ledeb., H. dissectum Ledeb., H. Moellendorffii Hance. 等ノ異名ガアル和名ハはなうどノ外ニぞうじゃうじびゃくし、さがうど、くはずうど、やぶうどナド、呼ブ名ガアル長門ノ大津郡ナル通村ニテハ俗ニ之ヲ源吾兵衞ト云ッテ居ル是ハ昔源吾兵衞ト云フ人ガ始メテ此植物ノ食用ニナルコトヲ發見シタカラニ郷土ノ人々ガ夫レヨリ此植物ヲシカ呼ブニ至ッタト云フコトデアル吾人ニハ此卑俗ナル方言ガ甚ダ面

白ク感ゼラル丶

此はなうどノ屬名ナル Heracleum ハ希臘神話中ニアル怪力アル半神勇者 Heracles ニ見立テ、Linné 氏ガ命ゼシ名稱デアル又其種名ナル lanatum ハ綿ノ様ナル軟毛ヲ布ケルノ意デ實際ニ此植物ノ葉裏ニハ綿毛ガ生エテ其面ヲ被フテ居ル、さがうどトハ嵯峨うどノ義デ山城國嵯峨ノ里ノ名ヨリ出デシモノ、くはずうどトハ食用ニハナラヌうどノ義、やぶうどトハ藪ノ中ニ捨テ生エニ生エテ居ル義、又ぞうじゃうじびゃくしトハ東京芝ノ増上寺境内ニ生ズル白芷(びゃくし)ノ意味ニテ白芷トハ是レ亦同ジク繖形科ノ一種デアル次ニはなうどトハ花うどノ意デ其繖形周緣ノ花ノ花瓣ガ大デ他ノ繖形科ノ品ヨリハ顯著ナルニヨリ名ケタモノデアルガ蓋シ一面ニハ用途ガナク徒ニ花ノミガ立派ナルモノダトノ意味ガ含マレテアル様ニモ感ズル

此はなうどノ分布ハ遠クハ北米ヨリ近クハカムチャッカ州、沿海州、黑龍江州、滿洲、北支那、西比利亞カラ我日本マデニ及ンデ居ルノデアル松村博士著植物名鑑ニハ我邦ノ產地トシテ擇捉島、色古丹、北見ノ利尻、石狩ノ札幌、羽前、岩代、下野、武藏、近江、山城、相摸、伊豫ノ石鎚山、肥後、薩摩、對馬等ガ擧テアルガ牧野先生ノ御說ニヨレバ我邦ノ分布ハ北ハ北海道ヨリ南ハ九州ノ南端ニ及ンデ邦內一般ニ產スルトノコトデアル余ハ山口縣下ニ於テハ未ダ前記ノ外ハ其產地ヲ詳カニセヌノデアルガ然シ同縣下ニ尙ホ余ノ足跡ノ到ラザル處モアレバ他ニハ絕對ニ產出シナイモノト斷定スルコトハ固ヨリ出來ナイ

和漢洋ヲ通ジテ此植物ヲ食用ニ供スルモノガアルカ否カヲ知ランガ爲メニ種々ト調ベテ見タガ無論食用ニ供スルコトノ記事ガナイ我邦ニ於テモ和名ニくはずうどノ名稱ガアルニヨリテ見テモ全然食用ニハナラヌト信ズル所モアル様デアル併シ明治三十九年一月二十日發行ノ植物學雜誌第二十卷第二百二十八號ニ農科大學敎授白井博士ガ執筆セラレタル『新領カラフト島ニ關スル最初ノ邦語植物圖譜ニ就テ』トイフ記事中ニ

(9) Heracleum lanatum Michx. (和名はなうど) 花アリ

(原註)—松前ヨリ西縁通里數凡百六七十里カラフト島エ渡海ロフラヤニテ五月上旬有此草蝦夷人皮ヲ去リ戯ニ食ス蝦夷地ニ多ク有草ナリ

トアル而シテ此(原註)トハ「蝦夷草木圖」ニ記載セラレタル原文ヲ云フノデアル又此圖帖ハ「寛政四年最上德内等巡見ノ際カ其後數年ナラズシテ調製セシモノカノ樣存ゼラレ候」ト同博士ハ記シテ居ラル、又東北帝國大學農科大學教授理學博士宮部金吾氏ガ官命ニヨリ調査セラレタル樺太植物調査概要中ニ左ノ記事ガ見エル即チ

Herashiturukine(土語)

土人皮を去り莖を生食し又火に炙りて食し或は曝乾して貯ふ

トアル由是觀之多少此植物ヲ食用ニ供スルコトガアル樣ニ思ハレル併シ此レヲ全然料理用トシテ食膳ニ供スル處ハ恐ラク長門通村(カヨイムラ)ノ外ニハアルマイト想フ今若シ同地ノ一旅宿ニ休泊センカ必ズ進ムルニ「源吾兵衞」ヲ以テスル客ハ其名稱ノ奇拔ナルヨリ忽チ好奇心ニ駈ラレ之レヲ應諾スレバ逆旅ヨリハ直ニ人夫ヲ馳セ新鮮ノモノヲ採集シ來ッテ調理シ之レヲ客前ニ薦メル客モ亦此珍味ニハ思ハズ舌鼓ヲ打タザルヲ得ナイノデアル

牧野先生ガ曾テ余ニ寄セラレタル書信ノ一節ニ曰フ「從來は唯粗大の雜草となり居って之を食用に供することは一向に聞き及ばざる所に有之右食用と相成り候へば茲に一新食品を得たる譯にて頗ぶる面白く感ず云々」ト余ガ新ニ食用植物ニ入リタルはならどト稱スルノハ全ク之レガ爲メデアル

上ニ述ベタ長門通村ノ山地ニハ何處ニモ多少生ズルモ字、番山ニ最モ多ク產出シめだけノ藪中ニ混生スルノデアルめだけノ丈六尺位ノ場處ニ生育セルモノ最モ賞味セラル、隣村ノ山野ニモ多々發生スルモ松ノ香アリトテ食用ニハ供シナイ、今はならどノ料理トシテ左ノ數法ガアルカラ之レヲ示サウ

一、膾ニ用ウルニハ沸騰セル湯ノ中ニ投ジ直ニ之レヲ引キアゲ後清水デ冷却シタモノヲ適宜ニ切リテ用ウル

一、浸物トスルニハ前法ヲ行ヒ胡麻醬油ニテ味ヲ付ケル

一、韲(アヘ)ニハ湯煮シタモノヲ豆腐ト味噌ト擂リ交ゼタモノニ入レテ造ル

一、鍋煮、通(カヨイ)ハ捕鯨地ナノデ鯨ヲ煮ル時ニハ必ズ此はならどヲ入レルヲ常トスルカラ源吾兵衞トイヘバ鯨ヲ聯想スル程此植物ガ此地方ニ於テ珍重セラル、

一、菓子椀ヤ椀盛、刺身等ノ添品トシテ茼蒿(しゆんぎく)、せり、みつばナドヲ用ウル様ニ之レヲ使用スルノデアルガ香味ノ掬スベキモノガアルトテ甚ダシク賞玩セラル、

一、鹽漬トシテ食スルコトガアル

終ニ臨デ中井博士ハ植物ノ鑑定ヲ、牧野先生ハ和名ノ意義ヲ懇示セラレタル御厚意ニ對シ謹デ謝意ヲ表スル

〔牧野富太郎曰フ〕繖形科ノ植物ニハにんじん(胡蘿蔔)ヲ首トシテせり、みつば、あしたば、はまばうふう、あまにう、おらんだみつば(Celery)、おらんだぜり(Parsley)、あめりかばうふう(Parsnip)ノ様ナ食用品ガアルカト思ヘバ又一方ニハ恐ルベキ毒ノアルどくぜり(おほぜり)、どくにんじん(失鳩答)ナドガアッテ極端ト極端トノ品ヲ現ハシテ居ル其レ故本科ノ植物ハウッカリト食フ譯ニハ行カヌ、從來私ハはならどナドモ若シヤ毒ガアリハセヌカト想ッタコトモアッタガ今小田君ノ記セラル、所デ見レバ決シテソンナ懸念ハ毛頭イラヌコトガ能ク解ッタ既ニ之レガ食用品トシテ多少デモ價値ガアルト判ッタ以上ハ之ヲ唯野生ノマヽノミニ放任シ置カズニ採テ畑ニ培養シテ見タラ必ズヤ其莖葉ハ一層大形柔輭ノモノトナリ且ツ其香氣モ亦粗ラキ野育チノ臭キモノヨリ穩和ナル佳香ノモノト變リ一カドノ新蔬菜トナルカモ知レヌト思フ蔬菜園藝ニ從事シ居ラルル諸君ハ一ツ之ヲモノニシテ數アル蔬菜ヘ尙ホ一ツノ新珍菜ヲ加ヘ得ルコトニ盡力シテ見テハドウダ無用ノ野生品ヲ化シテ有用ナル食料品トスルコトハ利用厚生ノ上確カニ興味アル仕事ノ一ツデアラネバナラヌ

あしたば(Angelica utilis MAKINO.)ハ海岸地方ノ野生植物デアルガ伊豆ノ七島デハ日常重要ナ食料ノ一ツデアル此レモ畑ニ作リテ改善シタラ佳菜ノ一ツニナルカモ知レナイ又はまばうふう一名八百屋防風一名伊勢防風モ尙ホ改良ノ餘地ガ充分ニアルト信ズル、坊間ノ百科辭典ナドデハ此はまばうふうヲ彼ノ漢藥ノ防風ト間違ヘテ書イテアルモノガ多ク何時モ識者ヲ顰蹙サスル防風ハ支那ノ產デ我日本ニハ產シナイ